

## 近世における大原魚山来迎院と勝林院の僧坊

鈴木久男

### はじめに

慶応4年(1868)1月、政権は江戸幕府から明治政府へと移行した。新たに誕生した明治新政府が打ち出した社寺に対する政策は、日本各地に大きな影響を及ぼした。本稿は明治政府へ提出された文書から、近世における大原寺僧坊(僧房)の特徴と継承されてきた文化遺構を明らかにしようとする試みである。

この研究ノートは京都産業大学日本文化研究所の共同研究である「京都文化の自然観と産業(むすびわざ)都市の形成に関する研究」の一部である。

### I 魚山大原寺の沿革

京都市左京区大原に所在する勝林院と来迎院はともに天台宗の寺院で、それぞれに本堂と僧坊(僧房・里坊)によって構成されている。江戸時代末までは来迎院・勝林院は魚山大原寺として一山にまとまっていた。また両院を掌握するために、梶井門跡の政所が置かれた。しかしながら明治政府の仏教政策によって、旧来からの寺院体制と経営は崩壊した。

#### 創建期～鎌倉時代

長和2年(1013)寂源は、大原の北東山麓に勝林院を開山した。寂源は一条左大臣源雅信の五男で、時叙と号したが19歳で出家した。永祚2年(990)6月、天台宗大阿闍梨覚忍僧都の灌頂を受けた。

勝林院は、円仁が9世紀後半に中国から請来した声明の道場として創建さ

れた。これ以降天台声明の道場の一つとして現在に至る。勝林院創建当初の地は、現在地とほとんど移動していないと考えられている。寂源の住坊に関する呼称や位置に関する情報は知られておらず明確でないが、宝泉院周辺部であろうとされている。

治安4年(1024)3月寂源は入寂したが、血脈は第2代蓮好、第3代長宴、第4代永宴へと受け継がれた。そして嘉保2年(1095)永宴の室に、融通念仏宗の祖とされる良忍が入った。良忍は天台声明を集大成し、天仁元年(1108)から2年(1109)来迎院を建立した。ときまさに、末法とされる世相であった。良忍は天治元年(1124)頃から融通念仏を布教したが、長承元年(1132)大原来迎院で入滅した。良忍逝去後血脈は2世の縁忍、3世湛敷へと受継がれた。来迎院建立以後大原の声明は、勝林院と来迎院によって受継がれ現在に至っている。

良忍が建立した頃の来迎院本堂の所在地は明確でないが、概ね現在地とされている。良忍が居住した住坊は「大之坊」と号していた。良忍は魚山声明を集大成したばかりでなく、融通念仏を確立し布教に努めた。そのかいあって、大原や来迎院は有力貴族たちの注目するところとなった。

当時の状況を、吉田経房の日記『吉記』<sup>(1)</sup>から見てみよう。経房は承安4年(1174)2月と8月の2度にわたり来迎院へ出向いる。来訪の目的は、血縁関係にある真如房尼や平親範への挨拶であった。1度目の2月16日における経房の行動は、鞍馬寺から大原へ入り、先ず極楽院の真如房尼に出会った。その後龍禅堂へ出向き瀧を訪れた。さらに来迎院ならびに第2世本覚坊上人(縁忍)に謁見した。加えて来迎院境内の御堂に安置された伏見護法寺本尊の毘沙門を拝し、涙している。そして再び極楽院へ戻り、極楽院の附属廊で食事をとり帰洛した。丈六の毘沙門天は親範の父に関係するもので、永万元年(1165)に来迎院へ移したものである。これから約30年後の建久6年(1195)、出雲の地に創建された尊重護法寺へ安置したとされている。2度目の8月17日は、極楽院で真如房尼に謁見後、来迎院境内に居住していた親範(圓智)

を訪ねた。御堂巡礼後に食事し、帰洛した。

2回の行動範囲を要約すると次のようになる。2月は、鞍馬寺から極楽院（真如房尼）へ、さらに龍禅寺（顕真僧都小堂）より来迎院・大之坊（縁忍）へ毘沙門天を安置する御堂から極楽院に戻り帰洛する。8月は、極楽院で真如房尼に謁見し圓智の住房を訪れ、その後各堂を巡礼し帰洛する。ところで親範は承安4年、来迎院第2世長老縁忍を戒師として極楽院で出家し圓智と号した。

12世紀前半から中頃の来迎院境内には、本堂・極楽院・龍禅寺・丈六毘沙門天を安置する御堂が建立されていた。加えて長老や有力貴族からの出家者（僧侶・僧尼）などの住房が御堂周辺に点在していた。また勝林院史料のなかに、隆盛時の来迎院は49院にも及ぶ僧坊が所在していたと記している。この時期に勝林院・来迎院および周辺地域が整備拡充されたと考える。

### 室町時代から江戸時代

足利義満の頃まで大原は比較的穏やかであったが、応仁の乱以降になると徐々に衰退が始まった。その一つは応永33年（1426）の来迎院本堂が焼失したことである。また延徳2年（1490）には、勝林院本堂と本尊が被害を被った。このように室町時代後半になると、大原寺全体が著しく衰退した。

寛永10年（1633）春日局は崇源門院の菩提を弔うために勝林院本堂を一新させ、大がかりな供養を実施した。万治2年（1659）には後水尾天皇と東福門院が大原へ行幸され、勝林院において融通念仏を受念された。また寛文8年（1668）には、後水尾天皇の第18皇子である盛胤法親王によって極楽院の修理供養が行われた。さらに延宝7年（1679）、後水尾天皇は極楽院に一切経を納めた。

このような勝林院であったが享保21年（1736）、再興したばかりの本堂と本尊を焼失した。この災害の克服には、時間を要した。本尊は被災後の翌年、元文2年（1737）に修復されたが、本堂の再建がおこなわれたのは、安永8

年（1779）であった。それは焼失から43年後のことであった。現在の本堂と本尊は、この時に再興されたものである。

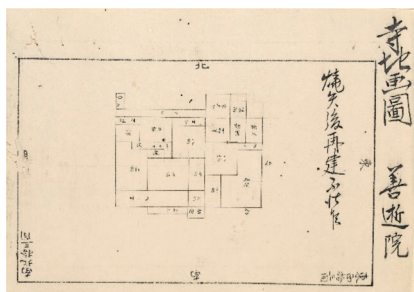
ところで江戸時代に著された地誌にも大原寺のことが記されている。まず天和2年（1682）の黒川道祐の『北肉魚山行記』があげられる。道祐は大原の状況や旧跡に関連する伝承について書き残している。詳細は省略するがこの時期、勝林院には6坊があり「理覚坊」「実光坊」「法（宝）泉坊」「普暁（賢）坊」を記している。来迎院は6坊とあり「向ノ坊」「南ノ坊」「北ノ坊」をあげている。また5坊のほかに、下僧の坊が2坊あったことも記している。

安永9年（1780）に秋里籬島が著した『都名所図会』には、18世紀末の状況を感じとることができる。指図は左に勝林院とその境内を、右に来迎院とその周辺部を描いている。

来迎院境内には、東から「来迎院」、「大□院」、「融通寺」が描かれている。なかで融通寺（浄蓮華院）はひととき大きく表現されている。また、来迎院の解説文のなかに「昔は坊舎一百余宇ありしなり。」とある。加えて図の正面上方には、城郭のような石垣が一際目立つ。そして石垣の上には、「梶井宮門跡」「極楽院」「大光坊」（実光坊）とある。

また、大原寺の周辺部に居住していた人々のことが『山域名跡巡行志』や『山域名勝志』に見受けられる。注目される記事として、江戸時代に芹生村の人々が勝林院村に移り住んだ。勝林院村内に「芹生の石」があり、「芹生のぬれ石」と呼ばれている。その伝承は、大原一の石工が、三千院石垣を造ることができず、涙を流したというものである。この記述から大原寺周辺部に石工集団も居集していたことが分かる。

文久2年（1862）7月、来迎院本堂の西隣に位置した善逝院が焼失した。しかしながら、門は焼亡を免れ現存している。現在来迎院会館の門となっている遺構がそれである。明治時代僧坊の再建は許可されたが、再建されなかった。



善逝院建物平面図



善逝院の門（2021年撮影）

### 明治時代～平成

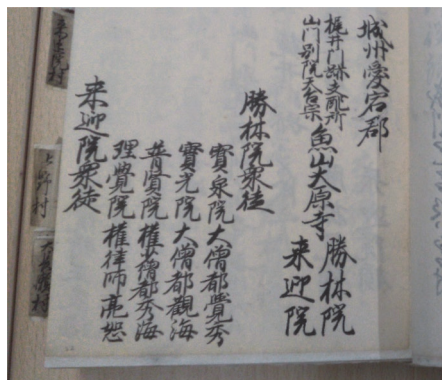
明治元年（1868）3月、明治政府は神仏の分離に関する法令を出した。そして明治4年（1871）と6年（1873）に政府は、上知令を通達し寺社領を没収した。加えて、明治5年（1872）「自今僧侶肉食妻帯畜髪等可為勝手事」の太政官布告を出した。明治元年11月、来迎院と勝林院は明治新政府の通達により「所在地」「宗派」「石高」「坊名」「僧名」などを記した調書と境内の略図を京都府へ提出した。その史料をまとめたものが『社寺録』<sup>(3)</sup>である。

次に、幕末から明治時代初頭の大原寺と僧坊の状況を見る。境内の北・東・南の三方は山を描き、境内を流れる谷川（呂川・律川）は二条の平行線で表現している。勝林院は図の左上段に、来迎院は右下方に記しているが、僧坊名はない。両院を管領する梶井門跡（政所）と持仏堂（極楽院）をその間に記すが、調書には梶井門跡（三千院）に関する記述はなにもない。ところで明治元年、天台座主を務めた梶井宮昌仁入道親王は環俗し梨本宮を名乗った。

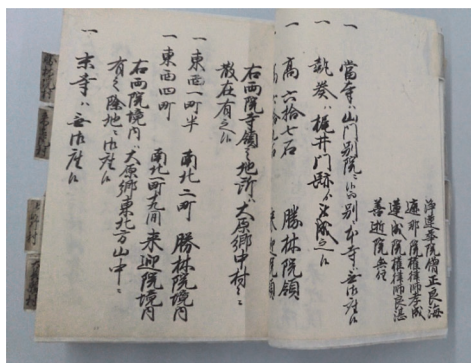
明治元年の『社寺録』調書にある勝林院の僧坊と住職は、以下のようである。宝泉院は大僧都覚秀、実光院は大僧都観海、普賢院は権少僧都秀海、理覚院は権律師亮恕とある。来迎院は浄蓮華院が僧正良海、遮那院が権律師孝成、蓮成院が権律師良湛であった。善逝院は文久2年に焼失しており、寺名は記されているが調書を提出した明治元年11月には再建されていなかった。

次に境内図から両院の坊配置を確認する。両院の僧坊は「坊」とあり、お

およその位置を知ることができるが、名前は記されていない。そのため調書にある、宝泉院・実光院・普賢院・理覚院・浄蓮華院・遮那院・蓮成院・善逝院の場所を確定することができない。そのため明治3年(1870)太政官の通達によって作図された『寺地画図』と照合すると、両院記載の僧坊の位置と名前を確定することができる。

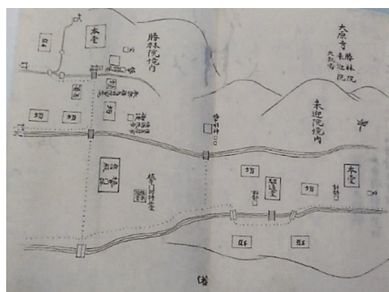


『社寺録』勝林院僧坊名と住職(部分)

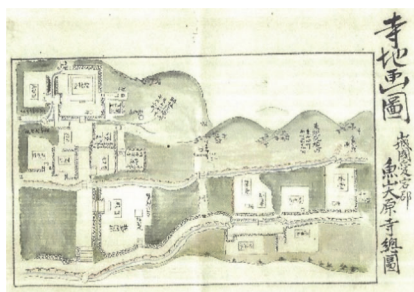


『社寺録』来迎院僧坊名と住職(部分)





『社寺録』境内絵図 (明治元年)



『寺地画図』 (明治4年)

すなわち来迎院境内図の右端は本堂、その西は善逝院、さらにその西側は浄蓮華院である。そして浄蓮華院境内の南、呂川南岸には西から蓮成院、その東隣は遮那院が位置した。この状況は今と変わらない。

勝林院は本堂の西は宝泉院、その南は角之坊、さらに南には普賢院と理覚院が、普賢院の東には実光院である。その後、角之坊と理覚院は廃され、実光院は西へ移転した。

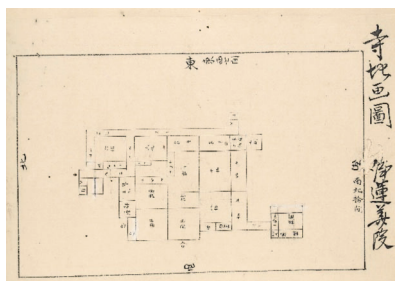
調書には三千院・梶井門跡に関する記述は一切ない。明治元年昌仁法親王は環俗し、梨守脩親王と改称した。そのため梶井宮は明治元年から4年(1871)にかけて、京都御所の東に位置した梶井門跡本坊から仏具類が大原の政所へと移され、その後政所を三千院と号した。この時期明治政府は、上知令や門跡号の廃止などを次々に発令しており、三千院を取り巻く社会的環境は、厳しいものであったと想像する。

明治16年(1883)の『寺院明細帳』<sup>(2)</sup>(以下、『明細帳』)に記されている三千院境内の施設は、本堂兼客殿、庫裡、物入、小屋、表門、中門などであった。極楽院は明治2年以降、三千院の管轄でなくなった。付図には政所の場所に、「梶井門跡旧殿」その東には「梶井門跡持仏堂 極楽院堂」とある。加えて勝林院境内にも、「梶井門跡持仏堂」とあるが、これは西林堂のことである。勝手明神に関する記述は調書にないが、境内地は記されている。

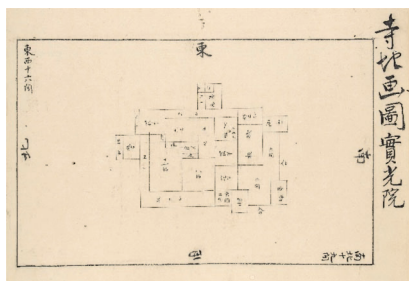
### 僧坊の焼失

寺院経営が困窮するなか、明治7年（1874）と明治13年（1880）に僧坊の焼失が相次いで発生した。明治7年1月浄蓮華院は、本堂である一間四面堂ならびに本尊の阿弥陀如来像を焼失した。しかしながら鐘楼と土蔵は難を逃れた。また明治13年12月（1880）には、実光院の本堂兼庫裏と本尊を焼失した。

このように相次ぐ火災で浄蓮華院と実光院の遺構は焼失したが、明治3年に京都府へ提出した『寺地画図』<sup>(5)</sup>や勝林院史料にこれらの建物平面図が残されており、旧状を知ることができる。なお、このときの実光院は現在地と異なり、大原陵の西隣に位置していた。



浄蓮華院建物図平面図



旧実光院建物図平面図

### 住職の兼務と合併

『明細帳』によれば住職と坊との状況は次のようであった。實光院住職の石室静洞師は、勝林院・普賢院の住職を兼務していた。来迎院住職の瀧本深達師は、善逝院・蓮成院と勝林院宝泉院住職も兼務していた。遮那院住職の多紀道覚師は、浄蓮華院を兼務した。大原寺関係ではないが念仏寺は、三千院住職の梅谷孝成師が住職を兼務していた。梅谷孝成師はその後、三千院門跡、天台座主を歴任した人物である。

以上見たように明治時代初頭の住職は、複数の坊の住職を兼務していた。こうした状況から、坊の合併も実施された。勝林院の一坊である理覚院は、



明治元年の『社寺録』に登録されていたが、『明細帳』の境内図には建物記載がない。調書には、「天保年中取壘宣已来寶泉院エ合併致候二付」とあり、明治元年にはすでに宝泉院が理覚院を管理していた。また大正8年(1919)実光院は普賢院と合併し、さらに寺域も旧普賢院境内地へと移転した。このとき理覚院の境内地は実光院が管理することになった。また昭和23年(1948)浄蓮華院は遮那院と、蓮成院は善逝院とそれぞれ合併し、現在に至っている。

明治17年(1884)、勝林院本堂の南に所在していた角之坊(食堂)の建物が売却されている。その跡地は、現在実光院境内に含まれている。

移転については先述したように実光院は、大原陵の西隣から一段下方に移転し現在に至っている。大原寺の深い関係にある念仏寺は、昭和13年(1938)に現在地へと移転した。このように目まぐるしく大原寺境内の様子は変化した。すなわち勝林院本堂から南側の景観は、明治時代以降その姿を大きく変化させた。

明治時代中頃から昭和初期にかけて、魚山の諸寺院を牽引した人物に梅谷孝成・孝永師がいる。詳細については省略するが、2人は三千院門跡や天台座主に就任し、とりわけ三千院の再建に尽力している。

大正8年、大原陵の西に位置した実光院は普賢院・理覚院と合併し、寺域を普賢院旧境内へ移転した。その後大原陵は西に拡張され今のように整備されたようである。一方西へ境内地を移した実光院は大正10年(1921)、客殿や庫裡が整備された。このとき普賢院にあった客殿の庭園は継承された。ところで実光院の正門は、本堂から南に南進する道路に門を開いているが、幕末や明治時代の地図には見あたらない。現在の門は、移転時に建立したものである。

## II 継承されてきた遺構の検討

現在、来迎院・勝林院・三千院には大切に保存継承されてきた遺構を見ることができるが、ここでは来迎院僧坊の蓮成院と勝林院僧坊の実光院につい

て検討する。おもな史料は『明細帳』・『寺地画図』・『両院僧坊歴代記』<sup>(5)</sup>である。

### 蓮成院

蓮成院創立の年時について『明細帳』は「創立年月不詳」としているが、『両院僧坊歴代記』<sup>(4)</sup>によれば草創は応永年間（1394～1428）とある。蓮成院は当初「北之坊」と号していた。しかしながら元禄17年（1704）になると「法音院」に改め、さらに享保11年（1726）になると「蓮成院」と改名した。そして被害状況は明らかではないが、享保17年（1732）12月に焼失している。その後再建され現在に至っているが、境内地は創建当初から現在地に位置していなかったようである。

寺伝によると旧地は、現在の三千院宸殿付近であったとされている。昭和元年（1926）の三千院宸殿建設にあたり、今の地に移転したとする説もある。しかしながら明治元年の境内図では、現在地に蓮成院を確認できる。移転の契機は享保11年（1726）の坊名改めのとき、あるいは享保17年の焼失後の再建時期が考えられる。



蓮成院正面（撮影：2021年）



蓮成院正門（撮影：2021年）

### 史料と遺構の比較

現在蓮成院は、来迎院境内を東西に流れる呂川北岸の山路を東にのぼり、呂川に架けられた羅漢橋を渡ったすぐ南に位置する。蓮成院は来迎院僧坊の最も西に所在し、敷地は道路より一段高い造成地に建立されている。蓮成院の南側や西側には、ひな壇状に造成された平坦地や石垣が点在している。

敷地外周は、自然石を積上げた野面の石積みで法面の保護と化粧を行っている。加えて薬医門系の正門は参道に直接開かず、西を正面としている。門外の呂川には、道を隔て羅漢橋が架けられている。また正門をくぐりぬけ階段を上ると庫裡に設えられた玄関に至る。玄関は庫裡の北東隅に設えられた妻入りである。庫裡は南北棟、玄関の右手（西側）客殿は東西棟である。この状況は『社寺録』の記録とはほとんど変化していない。

しかしながら、いくつか検討しなければならないことがある。その一つが、『明細帳』掲載の境内図である。注意しなければならないのは、客殿の建物方向である。すなわち客殿と庫裡が同じ方向の南北棟になっている。しかしながら『寺地画図』の客殿は東西棟、庫裡は南北棟である。また敷地面積などを記した明治中頃作図の平面図もすべて東西棟である。さらに明治32年に刊行された「天台宗魚山之總図」も客殿は東西棟、庫裡は南北棟として描かれている。よって『明細帳』掲載の境内図客殿の南北棟表現は誤りである。しかしながら客殿・玄関・石垣などの表現は、実に細密である。

ところで「天台宗魚山之總図」<sup>(5)</sup>には、今は継承されていない重要な書き込みがある。それは、蓮成院の庭園が「契心園」と記されていることである。

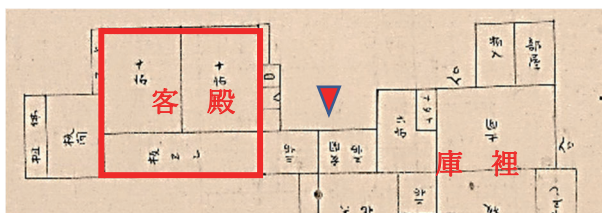
先ず現存する遺構と『明細帳』の記録を検討する。客殿は南側を幅1間の縁とし、北側は東西方向に2室の10畳敷き座敷としている。東側10畳間の座敷は東側に床を設えているが、西方の座敷は西辺に床と柵を設えている。

庫裡は入母屋造の南北棟で、梁行6間・桁行6間半で、北面西寄りに玄関が付く。一方玄関の東寄りには、梁行1間半・桁行2間規模の片流れ屋根の物入が付設されていた。門は敷地北辺の東西2箇所位置し、西側が正門の薬医門である。東側の裏門は棟門であった。正門は北側の参道に扉を開かず西向としている。このように門を主要な参道に直接開かなかったのは、勝林院の旧実光院に見受けられる。本堂に直接通じる道路に僧坊の門を開かなかったのは、本堂に礼を失することのない気配りであったと想像する。

寺伝によれば蓮成院の客殿と庫裡は、大正末から昭和元年にかけて修築さ

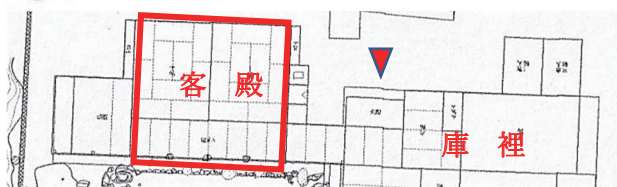
れたとされている。その契機は三千院宸殿と廻廊の建設であった。現在の蓮成院客殿西南角には持仏堂が付属しているが、『明細帳』作成の頃にはなかった。この建物は三千院境内に所在したもので、客殿の移築に伴って移築したとされている。

### 蓮成院客殿について



凡例：▼玄関

明治4年頃の玄関・客殿 ※赤枠は客殿（『寺地画図』から）



凡例：▼玄関

現蓮成院客殿 ※赤枠は客殿（庫裡間取は『寺地画図』から）

明治4年図の客殿は、東西に並ぶ10畳間の座敷2室と持仏堂を東西の縁が結んでいる。玄関を入ると三畳間で、客殿へは幅1間の縁が座敷の南に設けられる。縁の西奥は持仏堂である。座敷は東西に配され、東側の座敷は東に、西側の座敷は西にそれぞれに床が設けられている。玄関と客殿を繋ぐ廊下の北側には、客殿用の便所が設けられている。客殿南西の持仏堂は東向きであった。

現在の客殿（持仏堂）と庫裡は、寺伝によれば先述のように大正末・昭和元年の再建とされる。もとは梶井門跡政所、昌仁法親王の仮御所といわれて

いる。客殿西の座敷は上ノ間と呼び法親王に係わるとされる。東の座敷は下ノ間と呼びこの座敷は来迎院長老の間とされている。上ノ間には三千院との関りを感じさせる明治期の日本画家、菊池契月の襖絵が納められている。加えて鈴木松年、川北霞峰、木島桜谷、西山翠嶂、川村曼舟などの屏風・衝立も見られる。

持仏堂は客殿南縁の西詰めに位置し、2間四方の建物である。出入口は東向きで、西奥を須弥壇としている。



客殿下ノ間から上ノ間持仏堂を望む（撮影：2021年）

先述した内容をここで整理する。現在の客殿及び庫裡の規模や間取は、江戸時代末から明治初頭と大きな違いは見いだせない。とりわけ客殿・持仏堂は旧態の基本形態を崩さずに踏襲していると推定する。そのため現客殿の規模は、明治時代の状況とほとんど変わっていないのである。しかしながら客殿北側と南側の柱間寸法には、六尺五寸とそうでない寸法が見られ、幾度か部分改修されたことを伺わせる。庫裡も客殿同様、三千院境内に所在した建

物を移築したとされている。大正末・昭和元年の再建以降幾度か改修されたようであるが、江戸・明治時代の遺構を基本的に踏襲していると推定する。

### 庭園遺構

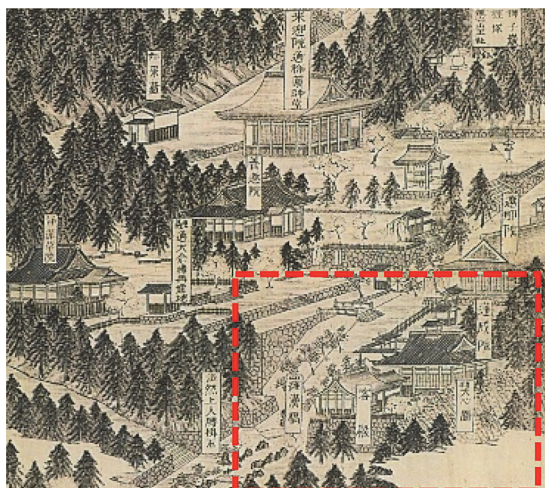
明治16年作成の勝林院・来迎院『明細帳』には、庭園に関する記述はほとんど見られない。そのため僧坊に庭園が設えられていたかなど全く情報が無い。ただし大原の寺院で庭園に関わる情報が記されているのは、寂光院だけである。明治32年(1899)発行の『天台宗魚山総之図』<sup>(5)</sup>に掲載されている庭園遺構は、蓮成院の契心園、三千院の聚碧園・有清園、宝泉院の盤桓園である。蓮成院の庭園は、客殿南面、庫裡の南から西面にかけて作庭されている。

蓮成院の庭園遺構は境内の南西に位置し、客殿と庫裡の座敷を視点場として作庭されている。庭園の西限は落差5mほどの急峻な法面である。一方南側は高さ6mほどの斜面である。庭園から西方への眺望は極めて優れている。庭園内に見られる石材は、来迎院境内の谷川に見られるもので、他地域から運び込まれた石は見られない。また100kg以上の重量に及ぶ巨石も使用されていない。

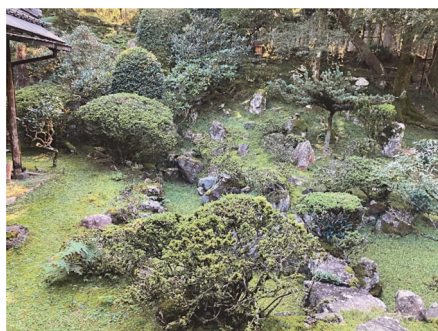
庭園の意匠は、東西に2分される。西半部は、池、滝石組、中島、石橋などから構成された池泉式とするが、東半部は境内南限の法面に大小の景石30石ほどを据え付けた石庭である。滝は声明と深い関係がある「音無の滝」を写したものであろう。東側の石組は来迎院創建時に良忍を羅漢が出現して出迎えたという故事を具現化したと考える。

なお、作庭の沿革や名称の契心園などについては史料がないため詳細は明らかでない。





「天台宗魚山之総図」にみる蓮成院（部分）



客殿から見た園池



庭園東半の石組

蓮成院の建物や庭園について、以下のように評価する。

- 蓮成院は平安時代後期に隆盛期を迎えた来迎院の旧跡内に造営された僧坊遺構の一つで、成立は江戸時代中期には成立したと考える。
- 現在の客殿は江戸時代に成立したが、現在の設えに改築したのは明治時代蓮成院の住職から三千院門主に就任した梅谷孝永師であった。改築は江戸時代の遺構を保存しつつ実施されたため、建物の骨格は江戸時代の色彩が色濃

くみられる。

□庭園は明治時代中頃は、「契心園」と呼ばれていたことが史料から判明している。

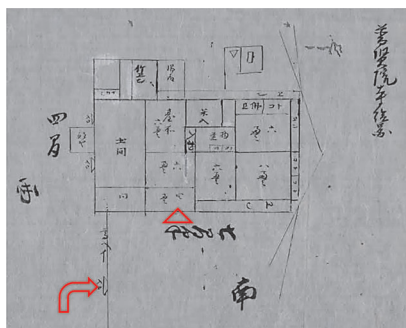
□作庭時期は、現存客殿と庫裡の造営時と考える。客殿南側は池と滝流れを主題とし、庫裡南側は良忍ゆかりの寺伝を現した羅漢石組としている。滝の水は、境内南東方、呂川支流の溪流を使用している。

蓮成院の遺構は、来迎院の歴史を継承する遺構として極めて貴重な存在と言える。

#### 普賢院僧坊

普賢院境内地は律川に架かる茅穂橋（未明橋）の北詰の北西角に位置していた。現在の実光院が所在する場所であった。そのため現実光院客殿南側の園池は、普賢院に作庭された遺構とされる。勝林院の現地踏査の結果、現実光院客殿は後世に改築されてその姿をかえているが、庭園と同様に、普賢院僧坊の遺構を伝承した遺構であると考ええるに至った。加えて客殿の北側の庫裡は、明治17年まで普賢院の北隣に位置していた勝林院食堂（角之坊）の一部が残されているのではないかと推定する。以下、その検証を試みる。

創立年時について『明細帳』は「創立年月不詳」としているが、『両院僧坊歴代記』によれば草創は応永年間（1394～1428）とある。普賢院は大正8年実光院と合併され、普賢院は廃された。このとき普賢院の西隣にあった理覚院の敷地は実光院が管理するところになった。



「普賢院本絵図」(江戸時代後期・加筆)



『寺地画図』にみる普賢院の位置(加筆)

### 史料からみた建物遺構の変遷

勝林院に所蔵されている史料から普賢院の建物がどのように変化したかを考察してみたい。

江戸時代後期に作図された普賢院僧坊の建物史料が勝林院に所蔵されている。この史料は、寛政から天保年間(18世紀後半～19世紀中ごろ)の僧坊を知ることのできる史料の一つである。このころの建物規模は梁行4間・桁行7間半の東西棟で、東側は床を設えた8畳間1室、6畳間が2室ある。建物南東の8畳間と6畳間は座敷で南に縁を設けている。6畳間北東は床、西は仏壇とし、東と北に縁を巡らす。

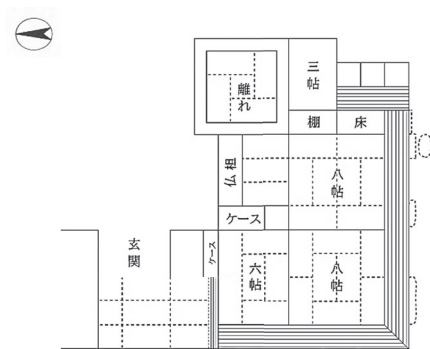
西側は庫裡の土間とし、妻の外側は納屋を付けその北と南を入口としている。また土間の南側は4畳間としている。土間の東は6畳の台所その南も6畳間としている。台所の東は・米入・納戸が配されている。

日常生活用の出入口(勝手口)は西側の妻に設けているが、玄関については明確に表記されていないが平入であったと考える。正門と座敷との関係からすると玄関は建物の南側、敷地南の正門から高塀中央の入口より庭に入り北の四帖間、あるいは縁から入室したと推定する。湯殿・便所は土間・台所の北側、すなわち座敷の反対側に配した。

次に、先述した江戸時代の史料と『寺地画図』とを比較すると以下のよう



光院は大原陵の西隣に所在した。このとき普賢院の建物や庭園は残され、実光院へと引き継がれた。



現実光院客殿間取り図（部分）

合併から2年後の大正10年、実光院客殿は建て替えられた。現在の客殿はこの時のものである。客殿と庫裡を兼ねていた普賢院の建物は、大規模な改造が実施された。その一つは客殿と庫裡が完全に分割されたことである。客殿は庭園に面し、床が設えられ8帖間の座敷2室と仏間で、概ね旧建物の東半にあたる。台所と便所・湯殿は取り払われ移動した。

現在、客殿から北へ約7mほど離れた場所に庫裡が位置しているが、大正10年のとき庫裡の場所や建物がどのようなであったかは今後の解明課題である。

以上のように、江戸時代後半から明治時代初頭、さらに大正から昭和へと僧坊は目まぐるしく改築、改修が繰り返されたのであろう。その歴史的背景や目的について、私見を述べる。寛政・天保から明治時代初期の改築状況は便所・部屋の増設、座敷・玄関の充実であった。部屋と便所の新築は居住者や来訪者の増員を想像する。また座敷の充実は来訪者への接遇環境の配慮と考える。

江戸時代以前から明治時代初頭にかけて、勝林院は西本願寺と声明を介し

て深い関係にあった。江戸時代以前から西本願寺は、法要の充実を積極的に進め、とりわけ魚山声明を習得させるために大原へ計画的に人材を派遣している。先述した建物整備はこのような背景の結果と想定する。今回触れないが建物の修改築は、実光院・理覚院・宝泉院・角之坊などにもみられる。明治時代末から大正時代の変化は、僧侶の妻帯が公認され寺院の継承が徒弟制度から家族継承へと移行したためと考えた。

### むすび

大原寺僧坊に関する現地調査は、平成 29 年ころから本格的に開始した。そして呂川南岸の尾根と宝泉院北側で、人工的に造成された平坦地を確認した。加えて呂川南の尾根上で発見した造成地からは、鎌倉・室町時代の遺物を発見することができ、この雛壇状の平坦地が僧坊の跡であると判断するに至った。

昨年僧坊の遺構をさらに明らかにする情報を得た。それは江戸時代やから明治時代にかけて作成された僧坊の間取図である。加えて明治初頭に京都府へ提出した建物図(『寺地画図』)の控も勝林院に保存されていることが判明した。これにより発掘調査は実施していないが、発見した遺構をより積極的に理解できることが可能になってきた。また現存する建物実測なども実施し、史料との検討を行った。

その結果、蓮成院客殿や庫裡は現在までに幾度か修理されたが、江戸時代後期の状況を留めていると判断するに至った。また庭園遺構も建物と同様に江戸時代の景観をよく保存していることが確認できた。加えて現実光院の建物は、大正時代に改修されたが座敷と庭園は江戸時代の色彩が残っていることも明らかになってきた。また江戸時代後半から明治初頭のころ勝林院の僧坊は、先述したように客殿・庫裡を修改したことが明らかになった。その背景に、大原寺が研鑽してきた天台声明を他宗派が習得するために、勝林院へ僧侶を派遣したためと想像した。今回調査した蓮成院・勝林院の建物は、江



戸時代や明治時代の古材を再利用した建造物である可能性が極めて高いと考える。すなわち現存する大原寺僧坊は、江戸時代の天台宗僧坊の面影を色濃く残す貴重な財産（文化財）として評価できる。

謝辞 今回、研究リポートの作成にあたっては、実光院住職天納玄雄氏、来迎院住職齋藤孝圓氏、宝泉院住職藤井宏全氏にご指導・ご協力を頂きました。記してお礼としたい。

#### 注

- (1) 吉田靖雄「大原三千院本堂の建立者真如房の研究」『大阪教育大学紀要』33巻 1984年 PP17～42
- (2) 「勝林院・来迎院・寶泉院・實光院・普賢院・遮那院・善逝院・蓮成院・浄蓮華院・三千院」『愛宕郡寺院明細帳』社寺課 京都府立京都学・歴史館 明治16年
- (3) 『社寺録』京都府立京都学・歴史館
- (4) 『魚山大原寺総図・社寺境内外別下図』京都府立京都学・歴史館
- (5) 「両院僧坊歴代記」『続天台宗全書』法儀1 春秋社 1996年
- (6) 「天台宗魚山之總図」国土地理院（国土地理院ウェブサイト）
- (7) 小野功龍「「天台声明」と「西本願寺声明」との比較研究」『仏教と雅楽』法蔵館 2013年

#### 参考文献

- ・天納伝中『大原の史蹟』（『大原百年史』より転載）1975年
- ・「勝林院・来迎院・寶泉院・實光院・普賢院・遮那院・善逝院・蓮成院・浄蓮華院・三千院」『愛宕郡寺院明細帳』社寺課 京都府立京都学・歴史館 明治16年
- ・『魚山大原寺総図・社寺境内外別下図』京都府立京都学・歴史館
- ・「両院僧坊歴代記」『続天台宗全書』法儀1 春秋社 1996年
- ・「天台宗魚山之總図」国土地理院（国土地理院ウェブサイト）
- ・「勝林院・来迎院・蓮成院・浄蓮華院・三千院」『天台宗京都教区寺院誌』天台宗京都教区宗務所編 2008年

